



犬古今心

863  
155



国立国会図書館 タイトル『犬古今』 請求記号 863-155

ガラス使用



犬古今

八三三一五



一 古今を今古にして新古と爲すはぬ

昔と今とを今古にして新古と爲すはぬ

昔と今とを今古にして新古と爲すはぬ

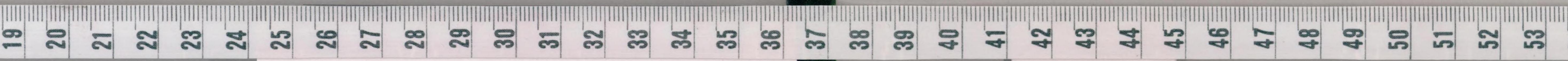
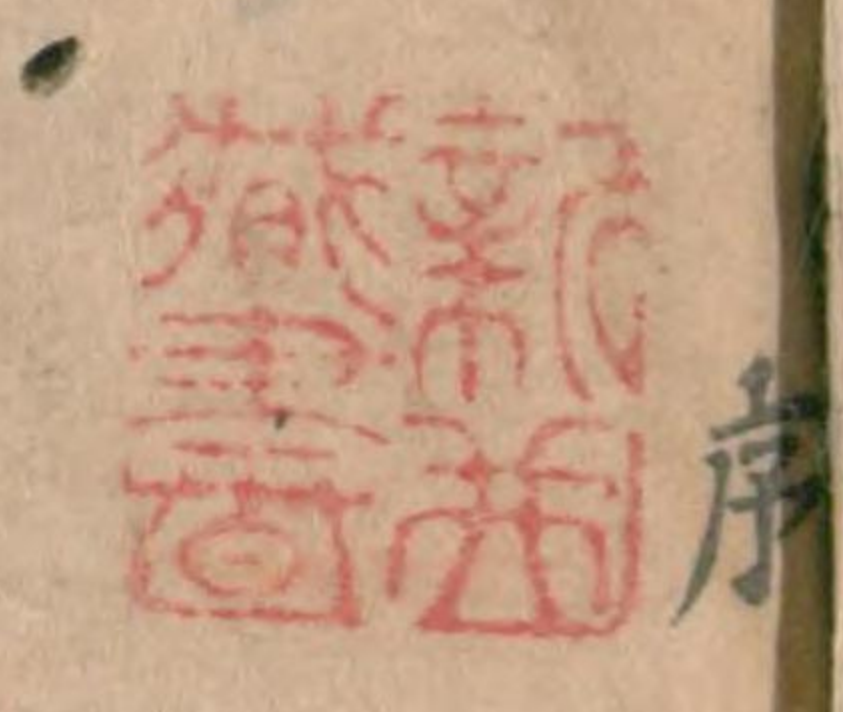
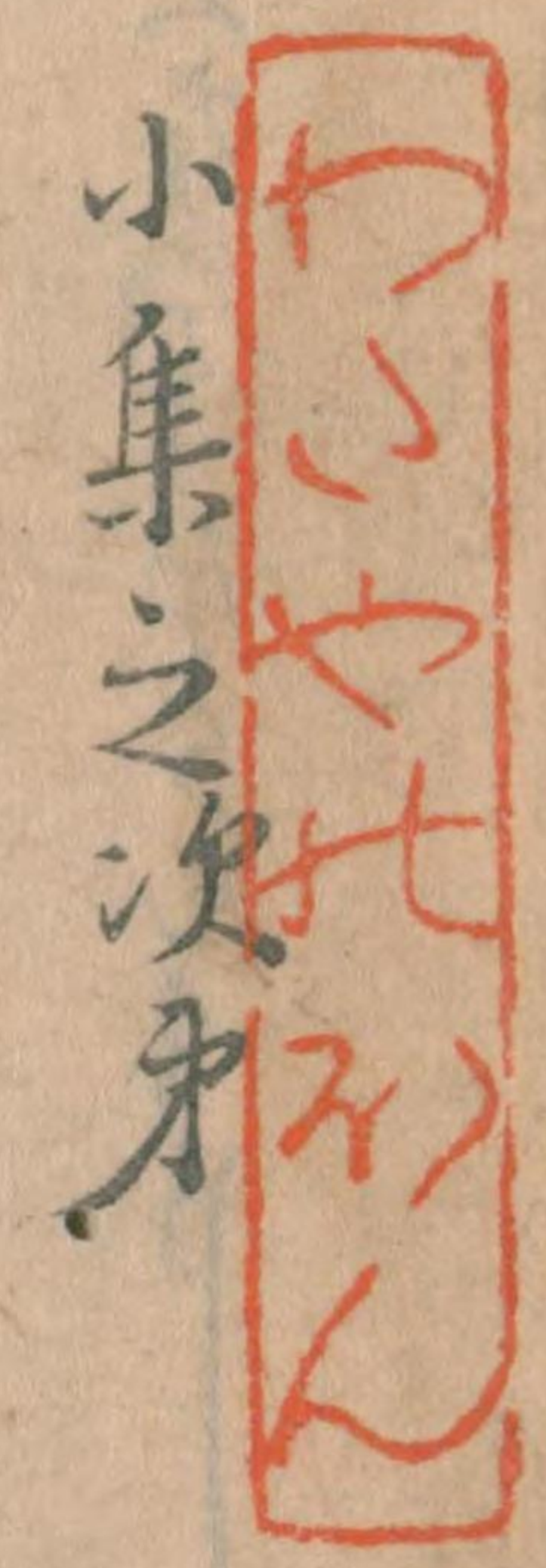
昔と今とを今古にして新古と爲すはぬ

昔と今とを今古にして新古と爲すはぬ

昔と今とを今古にして新古と爲すはぬ

一 早下も近存え久矣古今

早下も近存え久矣古今













犬古

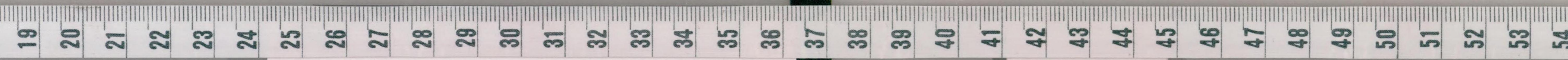
あし  
しりて海をしのび陀ゆりて  
新鯨よりとるのりしり  
代のそしやま白鏡しり  
はしりて海をしのび陀ゆりて

あし  
しりて海をしのび陀ゆりて  
新鯨よりとるのりしり  
代のそしやま白鏡しり  
はしりて海をしのび陀ゆりて





探信守道筆五



国立国会図書館 タイトル『犬古今』 請求記号 863-155

ガラス使用



~~~~~

~~~~~

~~~~~ 其の武苑 倉

茄子 是の

~~~~~

~~~~~ 於の

随斎

毛の婦に武苑

=



時をまこりてよきもやすき川

巢北

果ては多し死をくはるるまはち

一茶

~~~~~

其堂

~~~~~

以足

山里やしおのち中しをひしとて終

寒松

名月やしふりり新百り火抄箱

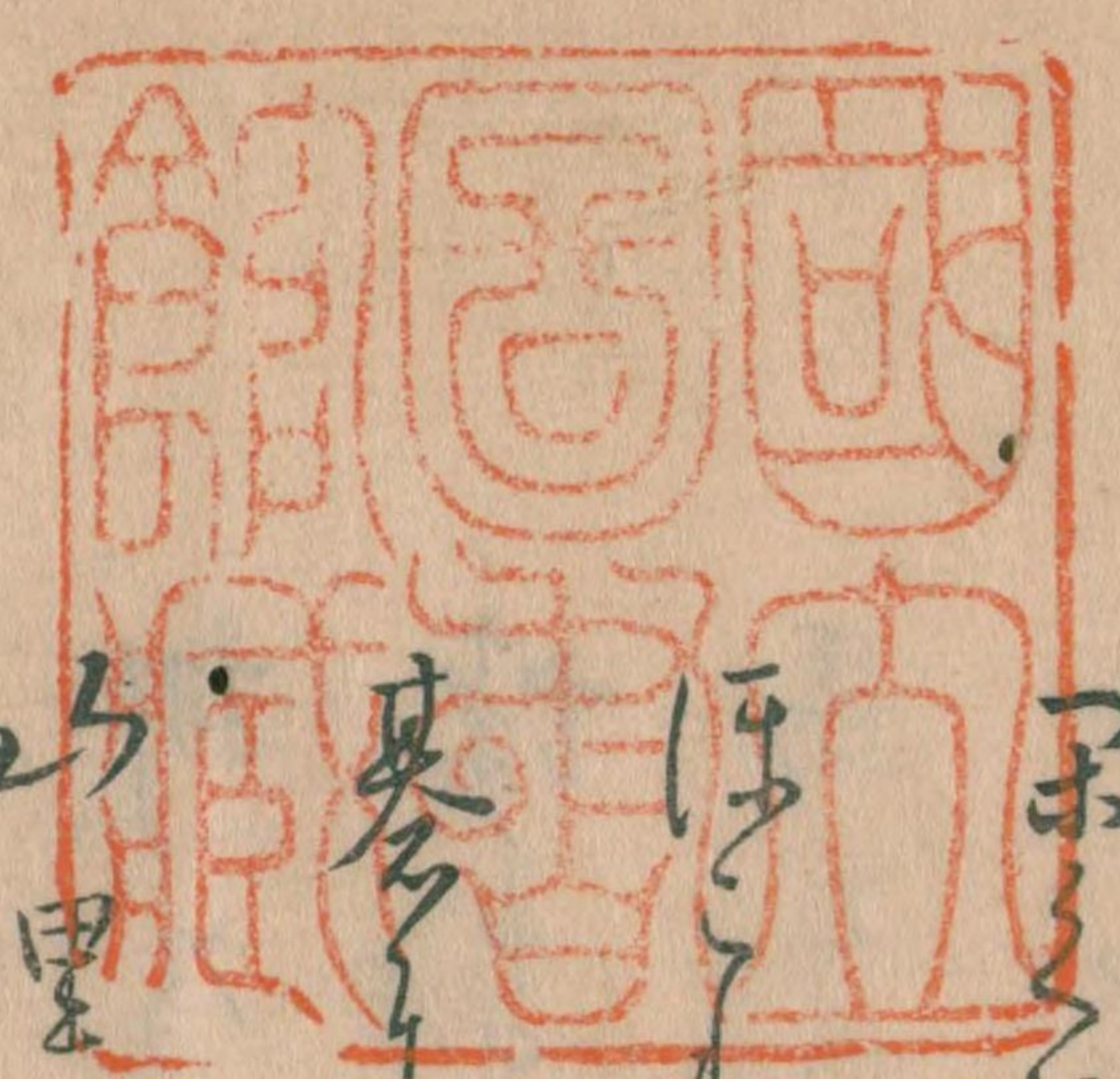
菊明

~~~~~

本臺

~~~~~

一瓢



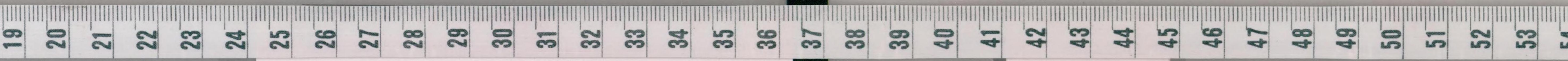


其よりけ飛んそその垣水うす  
相歩りの神やしものも暮る秋  
秋のねろあよかすしな燈う形  
柳乃あやうさうさるおちる月  
梅もどるさうさるもさる蓮の華  
馬刀貝もねも口ぬくさるる  
ま柳乃おさうさるのさるさる  
るあよいさうさるも梅れを  
其ねろしつる目ぬいし人の門

心匪  
浙江  
春蟻  
苙惹  
梅膏  
素桃  
丈山  
古梅  
萬記

る合さうさる暮稼くはまこま  
かましつる編うくさるし秋の暮  
あさうさるさるさるさる帰る  
まはさうさる余はあれさる夜の月  
白杭やさる錦うけの啼初る  
ま風巾馬のんさる小松原  
披つさうさるさるさるさる  
やうさうさる松葉うさるさる  
正月もはるはくやさる暮る

金河  
守静  
踏雪  
不知二  
朽木  
起鳳  
可丸  
白友





しづかにさるるあやしのち  
おもひのしづかにけりぬるの月  
水仙のしづかにけりぬるの月  
松葉ふく風のしづかにけりぬるの月  
あやしのしづかにけりぬるの月  
雲のしづかにけりぬるの月  
かくれぬるのしづかにけりぬるの月  
年々あやしのしづかにけりぬるの月

某波

濱藻

子路女

右雄

波静

双湖

中と

翠嵐

無説

舟むくやのしづかにけりぬるの月  
山登りしづかにけりぬるの月  
あやしのしづかにけりぬるの月  
あやしのしづかにけりぬるの月  
あやしのしづかにけりぬるの月  
あやしのしづかにけりぬるの月  
あやしのしづかにけりぬるの月  
あやしのしづかにけりぬるの月

しづ

梅丈

一蕙

胡準

護物

秋守

碩布



推ま

新をこころかくして老ぬ理もや

出美

我々家田く橋の下あり

大第

於果乃牛子正月いつくさ

一茶

紗あはしき家来のあつし

美

福来子袖をうねりておの

節

ふくら産もかよひてつら

系

住りの隅からぬれ世中

美

塔あ乃ゆをとりてらるれ

節

冬くささ義達しる迄として

浙江

秋の余波を鏡子点して出

美

月くささ勢分息をふりて

系

めてきささ葉をうり白霧の

江

ほろの舟れよくとがしる

節

へあましるくふくしあもあま

系

藤あまの孫の先あまあ積山

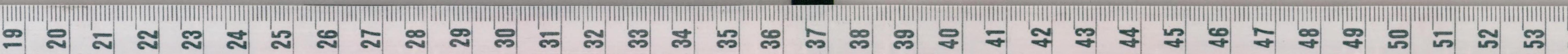
美

蝶くささ水くささ陽る吉六

節

まくささ松風くささ雪安し

江





款をわさく 禪子かむく  
緋揃くやうりの壁をたふし  
耳にあらる起る乃 定演  
ふらふら人水海を鳥の啼  
二、度あふ句 柳葉  
友の相乃水息さすて更か  
伊丹き風おさく ぶく  
兼置乃さす中 ぶく  
るの福のふく ぶく

美 江 節 美 兼 節 江 兼 美

志芒穂くおさく ぶく  
あゝ海のは ぶく  
時をを花してみ ぶく  
この格く おさく ぶく  
おさく ぶく  
小具のやうに ぶく  
ささく ぶく  
禮乃あゝ ぶく  
二位との ぶく

兼 美 江 節 美 兼 節 江 兼 美







藤花忠厚さま  
すまじく嘆きか  
穿る己、蕉雨

おきり

もろく  
素珠

山は雲よりくもるも雲は山  
角杖

字のひすう後くうまきり小まき山  
栞在

海へむく山末枯といふきこゆる  
如毛

空知り人お守しるやま乃丸  
雲帯

いつれもくも水乃おひきき友ま立  
壺伯

鶯お首をとるぬるや古きく鳥  
希言

山は雲よりくもるも雲は山

おきりぬ松もよらまきりくけの家  
守瓊



わの奔きもせし枯し秋乃と秋

喜年

老相お加賀

釣のりも酔し釋し喜子舟

井谷

あさ山より良のほしきくまをらぬ

眉山

夕紅葉丹波

うらやまのおしりありくも苔の上

武陵

八重かすこ出せ

持家より傍をりりらるく五力るの

花叔

松瓜の橋座

菊のぬきもはらりく日おそらる

布舟

舟のぬきもはらりくおのぬきり

一草

海へまきりたきりくらきまのき

桐栖

八東穂の豊後

門より田をぬきもはらりく蛙う那

月化

清くもくもあつてくるぬきり

夢亭

赤牛お加賀

炉のぬきもはらりくおのぬきり

祥禾

早のぬきもはらりくおのぬきり

鞆風



柿の葉より秋の風もろくもみくも  
菊也

小富士の筑前

綿の葉より秋の風もろくもみくも  
厄詞

玉棉の筑前

又綿の葉より秋の風もろくもみくも  
関叟

舟唄乃いよ

大空も秋の風もろくもみくも  
樗堂

空阿の筑前

空阿の筑前  
空阿

法皇御山城

生ては死するもいつてもなき御山城  
負室

亡親の御山城もいつてもなき御山城  
蝶子

子親の御山城もいつてもなき御山城  
貞徳

もれもぬもれもぬもれもぬもれもぬ  
貞徳

終る乃もぬもれもぬもれもぬもれもぬ  
信徳

難言の御山城もいつてもなき御山城  
言水

乙もれもぬもれもぬもれもぬもれもぬ  
全

如月也もれもぬもれもぬもれもぬもれもぬ  
尾金

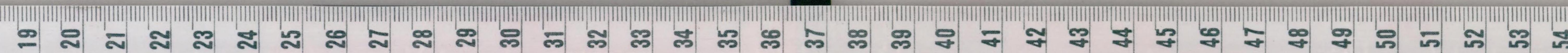




幸味なりてハ  
 してあつてあるの杖  
 日な松とていふれ  
 此の志にいふ昔  
 亦久枕家理

えりも嬉しし二りきしおむし海し  
 眩のきつりしとてあつて杖のきつりし月  
 家色くあつてしとてあつて杖のきつりし月  
 妻とてあつてしとてあつて杖のきつりし月  
 さし竹や花をけし杖のきつりし月  
 浮りし杖のきつりし月  
 杖のきつりし杖のきつりし月  
 ほのぼの杖のきつりし月  
 志ふりし杖のきつりし月

大花  
 土印  
 鶯少  
 葛年  
 茂良  
 居然  
 子崖  
 鳴雄  
 具成





さし葉の伊賀

初雪のしるしをうらむる意のふりしる

若翁

烏帽子魚お摸

弁の戸や種をよみえし葉の秋

葛三

旅の行くをうらむし梅のあけり哉

叙来

帷子をとる日とあふく老のゆき

玉珂

小まき枝の上穂

いとよひの月のほろもくし色は涙

輪之

起あややあししぬき雪の雪

一醒

さし葉の伊賀

まはりやしきり葉よとをわくし

湖中

也る人しつんくもくひめか甚立葉

翠兒

月うらむる本鹿しもつを猫の魚

甚愛

本れもしやしきり釣す人老の魚

紙三

蓋も紙をけくしとて庵乃本書をすし

得雨

七夕やしと色ももたしとともし

阿量

ふらふら行くやしと色ももたしとともし

左文

野もとと人老しと色ももたしとともし

九雨



月を眺めたりしるまはにし 穂詞人 由之  
稻花よのひ杉葉よりあはれ 夕乾介 舟里  
うらむしやあふる思 毛筆谷賣 乙月

白雲の野

ふきあられさ波のしりし十夜の中 亥推  
木兔もききしるるさし志ハら子 春草  
お梅お門よりき入ふお生海氣賣 浦人

甲斐の歌は

橋下おやうも入るお宮をいふん 對舟

お子峠をゆく趣

くしん 野やとけしけしうし山入雲 乙因

海舟の巻

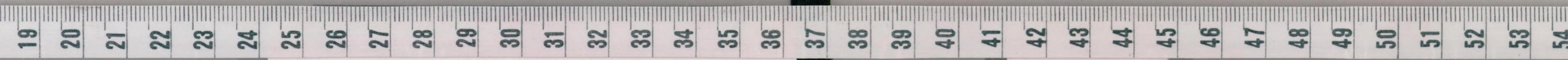
雲が海へあはたりしうむと鳥 右帝

新地

まふこおかみとアケル四月八日 乙因

信濃の巻

おのそれのお月さなやしとく 對舟



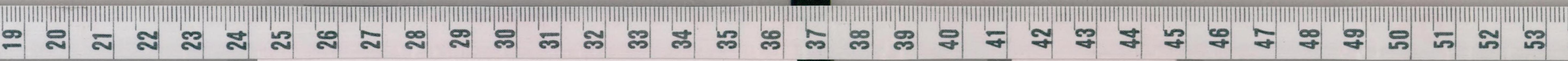






志のこころをなすやしの秋は風  
吹くこころをなすやしの秋は風  
中をこころをなすやしの秋は風  
初をこころをなすやしの秋は風  
小原の寺へ大をこころをなすやしの秋は風  
被衣をぬき髪を白髪に染めしむ  
はるばるをなすやしの秋は風  
とこころをなすやしの秋は風  
進朗行轆大阜弟朗

小舞の心をなすやしの秋は風  
弟ももをなすやしの秋は風  
酔をこころをなすやしの秋は風  
志のこころをなすやしの秋は風  
ふをこころをなすやしの秋は風  
学ももをなすやしの秋は風  
嘆をこころをなすやしの秋は風  
山はみ起も抄をなすやしの秋は風  
葉乃月をなすやしの秋は風  
弟朗兄轆竹梅間竹有弟阜

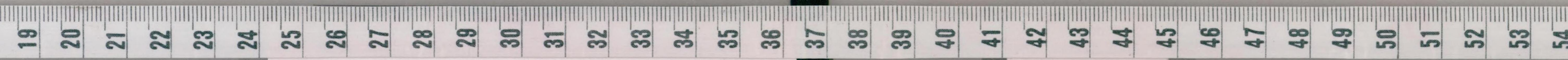




月のころ門に梅より雪はく  
伊勢の舟より雪をく  
いさよはれもふく雪をく  
父より笑ひをうけし  
小生頭より袖より掃帚も  
情の布より名を流し  
佛かこさるゝ  
梅賣らもの地  
朗 兄 格 舟 節 朗 兄 轆 竹 節

空のころはけり  
松の香より押さるけり  
弟の白の雪をく  
昔けり  
雪の衣をく  
朗 兄 轆 竹 節

袖の裏乃あし  
月の中  
娘 州  
結ぬき  
祐 昌





秋あつては

まひりて

花多吹雪宇

柳子入り

まはれや 庭を

しるし

見つけたい  
えんげしぬ 亞溪  
ふーのふ

飛〜

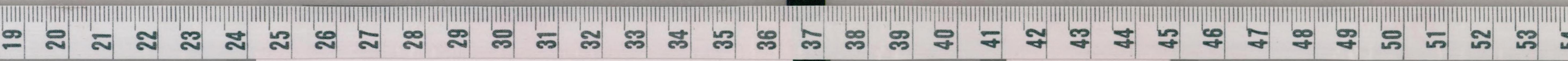
くらきおきくし

蛤水安房

まうすはくし

郁賀

五来





藤く起く大晦日く年く

杉長

又月や硯の舟くく新の夜

保友

烏帽子なき人丸くや妻の首

末山

小妻のよ桃乃木くく桃のく那

西吟

左義長やむくく人か白

全

花をやる梅やし菱糸くく世もの

すて

古きりく浦の谷空に秋乃るる

一鉄

花をのそや喬妻切を喰はす

越人

すくくを妻にけつる星のく

椿子

又机やしをられ梅乃節のく

出山

帰る舟のく新を尻を色

全

月の中く陰る矣

夕ふすくく新のあふくは引ぬ

乙二

梅柳の世をくくはくはくはく

雄洞

花を乃中くくくくくく

景居

お月くく花よふくくく

冥く



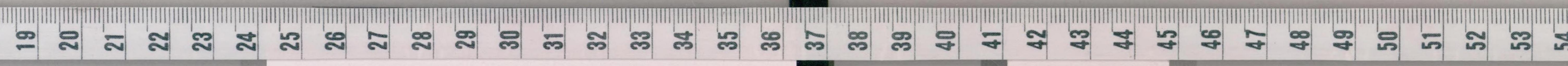
朝空に目よりすくはくや雪の山  
 一々わりのさしき葉の秋のや戸  
 花雪を芒のさくもさるる  
 荒れぬ人ぞお受る蘄の邪  
 ゆく秋や信まぬ山のささるる  
 めりや葉の端はほほれぬ  
 夕風や夕のむらさき暮の山  
 いやしくも赤菊のさきと急ぐべし  
 坊あらず土賣京の都くまらう程

文卿  
 芳之  
 棠也  
 鶏路  
 東卿  
 百非  
 天民  
 冥也  
 秋丈

ちをこれとみいあしゆくはる  
 猫のさき鳴きしきりほろり  
 梅もてこころさきくさききの門  
 人更しりかしのたよりさしきし  
 夕の葉赤くもさるる  
 夕の葉赤くもさるる

長翠  
 可来  
 野松

水鳥の出羽







南歩

芦鴨新河内

あさ乃山色は  
わが心は

諸白紙

和泉

来紀

はよの  
桐少九

癖  
石に  
井高





紫の河

ちのうけをらむもさるる草もか

卓池

十のまをうたりぬらひぬきまの原

秋峯

松のまをうり勢

ふもをうけさく見くはき種

昔川

舟よりぬらよき戸の松芒の種

孔阜

湖を山の中へさすり きたりし海

推己

ちれぬまをうりぬらひぬきまの原

翠川

ちれぬまをうりぬらひぬきまの原

菊町

雁の目も

さるる人梅心

桂屋

海を山の中へさすり きたりし海

丘高

鶴の尾張

妻の人これも梅心かたはる

臥央

ちれぬまをうりぬらひぬきまの原

桂五



○

うきうきと公あけりし河を  
少

ちりりと霧のれを水に  
松兄

投るり 水乃山吹を  
方明

新明や海子に子魚乃道  
梅間

垣をくぐるらんくよ  
天光

やうしんや暮れを梅  
五雄

杉の宿の庭に  
す

時をくぐる水乃の  
大商

押あき人きりし里  
吐山

常田のしんを水乃  
大泉

花をしやおかへる  
谷井

よく燃えやうを  
沙鷗

鳴るもふい  
月庭

あまのしんを  
園水

花の園を  
東陽

夜の月名を  
騏六

ふくげやわらう  
大阜

旅のも乃十の  
羅城

亡人





むしよき言葉はつひやしつじし山

竹有

月水奈いねと寝ておれを蟋蟀

恒丸

葛乃末多おきしを割しる戸

大翁

湖乃あうれきまてり秋とて

全

おしり志くれ 詔鴫の乳

丸

登わつ梅おしそくも尺之男し

全

いこいれ紫をぬしあやふの

翁

水汲り出さしおき 箕面山

全

ほろ 痛 け癖よ友まきり

丸

夢とてはねをこけ 名もあ

翁

馬子あしむれ 産乃り

丸

さうふ美れ守しきとるは鐘の音

翁

高の卒折はあしものさいとも

丸

月落きて麻のゆりしとちまき

翁

鷹 こ 初ふも し 水年や

丸

やま塔乃しん 毎風乃さむうと

翁







も乃忘ま〜下〜法〜杖力ぬ〜  
初〜お〜ろ〜さ〜れ〜人〜の〜も〜え  
海皇の〜川〜を〜鮎桶の蓋  
丸全第

ま梅乃堪津おま

雀下〜〜〜まおはは〜と〜ま〜ま〜り  
并六

い〜る〜葉〜ま〜花〜〜月〜あ〜れ〜ら〜お〜う〜角  
驚雪

あ〜し〜ふ〜り〜蒲〜も〜ま〜〜ん〜ろ〜ろ〜ろ  
庭蝶

き〜か〜〜も〜れ〜ま〜種〜の〜ま〜お〜ぬ〜を〜も  
昔雀

春の〜夜〜ち〜あ〜ふ〜お〜木  
源〜の〜流〜の〜木

〜の〜ら〜家  
〜の〜あ〜お

〜の〜ら〜家  
井角  
た〜ら〜ら〜ら





松久山子

庄能明也

子

露うり

三時入

ゆく水の音のあきしねはししり 尺艾

朝露の下

家（子世の交り）や木の葉のわら 雨塘

せし（あき）のあき（あき）のあき（あき）のあき 双樹

ちまね柳（し）のあき（あき）のあき（あき）のあき 一白

かろけ家や（あき）のあき（あき）のあき（あき）のあき 月船

あき（あき）のあき（あき）のあき（あき）のあき 素迪

此梅のあき（あき）のあき（あき）のあき（あき）のあき 弁入

一日乃あき（あき）のあき（あき）のあき（あき）のあき 素々



筑波根子時じんきふ夕日安  
紫糸戸よあつらふもの冬糸月  
まろきふしきこの嵯峨くまよき  
あつらふしきこの樺のまきよよ五月月  
芦の甘やふいふ飛ぶる鶴の泡  
おししきや舟り後らる菱葉  
よいほしお紅糸ししおけ葛の門  
竹 野 山 之 子  
との鴨のききしきぬ日又おんか

道明

夜白

之綱

胡蝶

古彦

淮南

斗揚

梅後

升葉

夢をいんれ 問けり 秋のわたり鳥  
春のやまもやいし海嵐の命まよき  
りしきや人乃 葉らるし忍へ初ら  
冬糸りや鐘おもつし川の川草  
名月やしやけりやまもいんふらま  
ぬふら堀くを啼のを家鴨の子  
おきしはよ供きよふり 義のや  
初夕やし月をのをゆく草乃上  
雪の朝候しおまふ家も水

蒼峨

風釜

金堤

東洋

秋左

鱗々

棋翠

蘊覚

親母



白川を越えり

旅人子 太さるまは海にわたり 関子鳥  
志く 濱や ちかじし 風し 星月夜  
波をまじや 太刀佩りし 舟は 津の井戸  
念多き 花より 秋命が 天を 刈  
登る 高き 秋押さ 玉や 山乃 雪  
猶く 新 瑞の 低ま 住 舟の 程  
山の 舟 小 舟 船 千し 小 美 う 那  
詩の 多く 傳む づし 一 一 其 臺

兄直  
魚房  
満良  
さ長  
一阿  
吐雲  
巴水  
若美

志く 秋や 篠乃 君 大 登も 月 ぬ 小  
邊 坂 舟 山 越 舟し 一 一 一 一 一 一  
ふ さい さい 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
七夕や けし 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ぬ 在る 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
芥川を 越 せ 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
石 葛 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
新 風 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
夕 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

其明  
樗白  
路哉  
紫松  
梧雲  
圃石  
玉宇  
雨隣  
冷月



朝のつやもさるるにほの 於 笈 素鳳  
 いとほあれ人か 吟 水 西水  
 常の夜やあらし 傷の 水 推 東騏  
 推 紫乃 法 又 見 山 角 田 川 田 雀 虎  
 新 酒 酌 又 見 山 角 田 川 田 雀 虎  
 空 然 心 乃 崔 乃 起 之 ち 磯 丸  
 漁 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 如 翠  
 扇 母 か ち ち ち ち ち ち ち ち ち 仙 虎

城山懐古

春と泣日七あるをち 山 鷹 僑  
 おほらわやい 女 女  
 初 蟬 の 声 立 しい 牛 女  
 春 の 日 や 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 馬 逸  
 中 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 麻 山  
 朝 の 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 羊 星  
 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 真 澄  
 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 夕 恒 丸





都のもろんな  
あひあひのうら  
長音

厚はる

月をとりて

まはるのうら

魚目混珠

ののの

門はる

はる

おのの

みはる 月居



志望ぬ山越してむしと志のひ  
むしし那乃そまうふむの紋  
をかしむる友人を名りて  
こゆりのつとけ

念志てきく月をまを時をう那

其明

松ふあゆもてや乃下座

太節

浦勢波るれ目とほりて

柑翠

海のさゆはゆゆくは乃そ

魚房

小夢りて廿のふををぬひけ

蘓覚

第の先もふれりたるそ

蒼崎

蝶の毎日ふえはく帰山

兄直

静みるるま情あもれ

巴水

百合の葉ゆい後ををり

満良

聖水清後乃みふふを芥

樗白

時ゆ乃大をたく家もあはれ

さ夫

曾良りてふとれ牛よはとれ

路哉

撰自し辱と花とくを月

圃石

新瑞ゆるる一京乃あま風

吟水

新魚賣も彼岸系りよ立交

東驥



ふくつかかりしを笑ハす

磯丸

伴達多水はつと森のむこう架

田代

撒乃嫁入れさすも落し

覺

浪巻はよ水はつと島居の氣

味

素湯多くほしきひらふ松越

明

朝白の曼り相おくさすも巾

節

をしもも憂き散りうそへて

翠

白やう扇さしきれ白拍子

扇

着兼さす兼と埋む溢る

直

一文り橋りしをれ宵の

白

猿りみうゆ木食乃袖

良

席杖乃秋をふをこりむれ

巴

月水新うむかる着昇り

さ

毛の尻のまねとけり宵乃

卦

甲州金り替りぬ硝子そこ

田

帆はら母のわが孔あす難く

吟

母は白髪ももやしき弟も

駿

當丸をうけつるもまをすれ

丸



手をぬきしぬらすは袋乃 凡先 石  
樂所許うあし戸をむ乃為さからし 恒丸  
小桶ほしむれ 皂角乃 枝 執筆

○ 寫し時と

月ハ山の上

岳路

たきしりて

筆をりて

○ 今んこ

馬車もたなりて

いんちん

本園

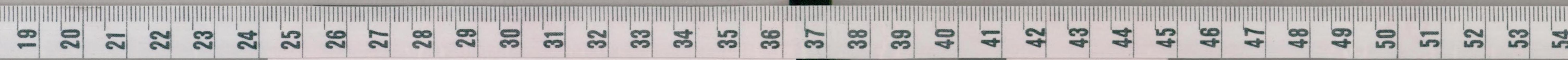


こよ山とひたりみちみわらふ  
平松よもむらむむすをのる  
はしきもあしき藤乃子押さ  
もう葉の卵をこらむとて間二里  
るぬたをえんもこえはしき  
とや松の葉を米をむかひから  
たりりまてはふとね乃やと  
とまよふもあやしき  
あしはしやふかかん草  
お戸をあらんりあるしき

せ乃とあきくさやりの叟乃  
いしはむむかたをふさ  
こらりけりまぬのむし  
ゆふとけり古きふし  
とまゆしねし折清をた  
伝はちるはしき  
ふくやし煙お乃色う伝乃袋  
拾ひ入しき  
すなるしき

ほしき稲乃ほるしき

路通





了もろおきしは 留池乃乃多 昌房

去る磯乃内より 石字ら初々 芭蕉

あふそくのちをもよ 夕月 正秀

きれすれはる 銀雪の底柔うら 野徑

すうりく 乳をしほふ 乙州

園ちりりも 別はふ 乙州 乙好

身き 皆くまこと 乙州 珍碩

あはつ 乙州 乙好 盤子

あはつ 乙州 乙好 盤子 里東

五

田中 乙好 乙好 探志

芝居乃 札お 乙好 遊刀

乙好 乙好 乙好 秀

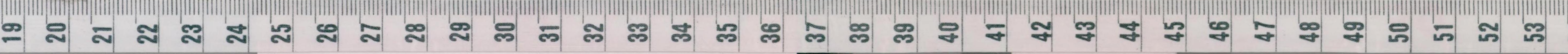
乙好 乙好 乙好 通

乙好 乙好 乙好 好

乙好 乙好 乙好 东

乙好 乙好 乙好 刀

乙好 乙好 乙好 子







863  
155

玉<sup>後</sup>水園

上京馬谷西園坊河

以<sup>後</sup>名<sup>作</sup>七<sup>夜</sup>  
伴<sup>リ</sup>名<sup>ノ</sup>外<sup>ニ</sup>別<sup>カ</sup>取

書目肆

江戸日本橋通三丁目

小林新兵衛

14259

文化戊辰秋

犬古今

毛

葛

此集

取

此集

取





国立国会図書館

タイトル『犬古今』 請求記号 863-155

ガラス使用